

ルールに関して選手会意見書

平素、雪合戦大会の開催にあたり、お世話になっております。雪合戦関係者の皆様へは2018年の冬シーズンを終え、次のシーズンを見越して既に活動が開始されている時期かとも御察いたします。誕生30年を迎えた雪合戦の発展を期待しております。

さて、日本スポーツ雪合戦選手会では、今後の競技雪合戦ルールの可能性を選手の視点で意見交換をしています。

雪合戦ルールに関しても統一される事を期待し現行ルールへの提言と併せて取りまとめました。

ただし、現在の雪合戦組織同様にルールの運用についても一部、異なるルールである以上、両組織で大きな改定が行われない事を大前提と考えておりますので、あくまで組織が一本化された上で、将来的な「雪合戦ルールのあり方」への参考意見として提出させていただきます。

テーマによっては一方のルールに関する要望項目の記載ありますが、歩み寄る事が可能な案件については、是非ご検討をお願いいたします。

2018年5月1日

日本スポーツ雪合戦選手会 代表 上野 克浩

選手会役員会

アウトコールを受けた選手の意図的な補給、中断してチームへイエロー宣告 (今回の昭和神山でのルール運用に関して)

①

1【中断してイエローに反対する理由】

- ・意図的な中断策を戦略として考えるとチーム、選手は即反応しました。
現行ルールでは中断リセットになる → バックラインのからのやり直しこれにより、劣勢だった陣形が、優勢になる機会が生まれます。

【例】

- ・セットを落とすと敗退の場合
- ・フラッグ奪取でしか逆転する可能性がないのに、センターを相手チームに取られている場合
- ・その試合までにイエローカードを受けていない場合

以上、そのため現行の中断してイエローの宣告に反対するのが選手会の意見です。
ただし、アウトコールを受けた選手の補給行為を 容認するもでも無いです。
この点が、判断の難しい要素かと思われます。

現行のルール、置いていく、持ってででも十分な「ルール」として定着し、選手も理解している事です。
反則部分に固執する事で矛盾点かと考えます。 解決するためには以下の点が考えられます。

中断し、その場からの再開。

「現行ルールのバックラインからのリセット」ルールの改訂です。

中断宣告だとしてもその場からリスタートであれば問題がないと判断します。

しかし、この『中断しその場からというルール改変』は、日連ルールとの差異を考慮すると
その他のルールにも関係してくる大きな関連事項があり、踏み込むべき時期ではないと判断します。
元々の共通項目であった、雪球をその場に置いてコート外に出るでも、(昭和神山は表示削除)
現時点では 十分適用出来るルールではないかと考えています。
罰則ルールの記載があっても、運用しない方法もひとつの方法と考えます。

【補足】

アウトコールを受けた選手が、雪球を補給した場合 もうひとつの指摘

特にスタート時センターへ走る選手がアウトコールを受けても、プレーを継続する事例は多く見受け
ます。センターでアウト宣告を繰り返す中でも、その時点で持っている雪球は補給した事になります。
選手から指摘がありましたが、アウト後の補給は、転がすだけでは無いという点です。

【選手会の意見】

当面はその場に置くという、従来の旧ルールの適用の方が、 現実に即していると判断します。

2【イエロー適用について】

抑止力との考えでは中断よりも、個人へのペナルティの方が抑止力もあり、中断する必要も無い
という意見もあります。これも、個人には「レッド」しかないため、運用が難しい点かと思えます。

◎一案として、選手のアウトカウント以外に「マイナスポイントを加える」という新ルールの考え方です。

抑止力を考えると効果的との意見もありますが、これも現状では検討出来る段階ではないと判断します。

3【現行の警告イエロー、退場レッドについて】

個人退場については、退場という適用が、重いために中々、個人への適用に躊躇されるのではないでしょ
うか。 競技妨害でチームにイエローと出たチームかからの意見ですが、チームにイエローで競技妨害が
適用されたと言うことは、本来個人にレッドが出ているはずで、適用項目と判定が曖昧です。

個人へのイエローが無く、レッドの判定が出にくい状況で、抑止力の効果が薄れて、前述のルールにも
矛盾が見られるのであれば、アウトではなく「マイナスポイント」といったルールも検討されるべき、といった
意見です。

■ オーバーコールにならないセーフコール アウト優先

【背景】

現状、明らかにシェルターワンバウンドだったり、シェルターの破片でアウトコールを受けたりとアウトコール優先で選手が外に出てしまうケースが多く見られます。

逆に「審判の力関係」により、アウトコールが覆っている現状も多々あり、これもルール通りになっていない矛盾する点です。こちらは審判が履行出来ていないという視点です。

さらに、単純な見落としによる《アウトを取れない大きな状況》も同様です。

競技として考えていただきたい点であり、今回、選手から一番多く声があがった項目です。

- 1 競技として見るなら、その判定一つが勝敗の結果に直結しているのが雪合戦です。
- 2 本来の競技であれば、近年のどの競技でも取り入れている VTR判定といった方法が考えられますが現実的ではない点と、試合の流れのなかで攻防が雪合戦であり、中断は出来る限り避けるべきと考えます。

それでもひとつのアウト、セーフが勝敗を左右する、この矛盾点を選手が少しでも納得できる方法を検討すべきと考えます。

オーバーコールは、アウト・セーフの判定が出た場合に選手に与える混乱を避けるための事と理解しますが、単純な見落としも含めて現状、選手からは「雪合戦だから仕方ない」という意見が多く聞かれます。

競技として雪合戦を取り組んで行くのであれば、これを解決する方法から再考されるべきことと選手会として希望します。

中断してその場から再開であれば、中断して判定という方法も考えられますが、同様に大きな改定は出来ない点を考慮します。少しでも判定を明確にし、オーバーコールを認める方法として

□ オーバーコール出来ないセーフコールについて（国際雪合戦連合へ）

● オーバーコール出来ない理由

二つの判定で選手が困惑

● オーバーコールが出来る体制にするために

【中断せずに審判体制のスキルアップを図る】

- ・審判のペア制、必ず二人以上でアウト判定をする。
- ・双方の審判によるアイコンタクトによる瞬時の判断。 アウトコールの言い直しが出来る
見る位置での優先審判、責任審判など取り決めを整理する。※責任審判とは上級審判

【中断協議をする】 将来的な検討として

- ・判定が別れた場合、中断して、アウト判定を確認する。

※中断リセットスタートルールにもかかわる点 → 中断の開始はその場からスタート
全術の中断してイエローコールの適用も可能になります。

今取り組める最善の方法としては、前者の体制確立と考えます。

■ 昭和新山大会審判体制での有効な方法案として選手の声

「電子ホイッスルの導入」記録員が鳴らす。市販されている自動でなるホイッスル。

本件は、過去にもありましたが、30回大会において、記録係りからの伝達が
上手いかず試合時間が10秒近く伸びてしまった事例をみた選手からの提案です。
(零一せたな町役場SFC戦)

◎目的

- ・セットタイムアップの主審判断を集中させること
記録員のカウントダウンと、選手のプレー、(フラッグの抜くタイミング、アウト判定)など
主審を判定に集中させる事ができます。
- ・記録員からの時間伝達と見て、判定することには能力的な負担が伴います。
- ・現実的には伝達段階で、1秒未満単位では多少の誤差が発生します。
審判はブザー音で判断し、従来の審判動作で終了する流れです。

他の競技で導入されている大型の時間表示機材の導入が見込まれることが理想ですが
予算的に難しいことは明らかであり、対応する方法としての案です。

「後方審判の審判台の導入／審判メガホンの導入」

- ◎どうしても見落としが多い後方シャトー付近やシェルターの内側の判定に対応する方法として
後方のコート対角上にテニス等で使われる審判台に第7審判を配置すると、両方のコートが広範囲で
カバーできます。
併せてアウトコールが出たときの選手への伝達フォローとして、そこからメガホン等による
呼びかけが入ればより効果的です。
理想は、対角2箇所ですが1箇所でも効果が期待できます。

昭和新山では過去にセンターに同様に審判台の設置を導入された経緯がありましたが
審判人数、配置も変わり、場所を変えて、検証する事をご提案します。

□ 監督と選手の自由交代 選手会メンバーからの提案／パブリックコメントへ提出予定

【現行理由】

- ・競技ルールによる、監督の役割として主審に質門が出来るのは
監督だけである。⇒ セット間などで監督が変わったりすると責任の所在がはっきりしないため？

【改訂理由】

- ・リザーブ選手不足や、ギリギリの人数チームが増えてきた背景。
チームとして全員が出場したい心情。
- ・選手／監督を自由に交代出来る事で、本部受付の登録チェックなど確認作業も軽減できるのでは

【改訂】

- ・セット間でも試合の中で、選手監督を交代できる。
- ・監督は役割ではなく、一つのポジションとしてみる。
- ・チームの代表として、キャプテンを置く。
キャプテンマーク、腕章などを携帯する。
- ・選手7名の場合は従来通り。

◆ルールに関するコメント、改訂案への声 (日本雪合戦連盟ルールに対して、加盟チームより)

□ フライングに関するスタート時の主審動作

現行国際雪合戦連合で採用となっている方法は、スタート時に主審が「ヨーイ！」とコールしてから、一連の動作で笛を吹いています。
両方の大会に出場しているすべてのチームが、「ヨーイ！」のコールを支持しています。
日本連盟の現行ルールも同様にすることをご検討いただきたく思います。

- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| ① 『第〇セットを開始します』 宣告義務 | 選手は構える → 位置についてと同様 |
| ② 「ヨーイ！」
～1、2、の3 のタイミングで | 選手は静止 |
| ③ 『ピッ！！！！』と 笛を吹きます。 | 選手スタート |

②から③の動きについて

「ヨーイ」と大きな声でコール。

- 1、笛を口にくわえる。
- 2、両手を180度広げる
- 3、笛の合図と一緒に真ん中に両手を合わせる
「ヨーイ」以降は、従来の審判動作と変わりありません。

副審は、審判の「ヨーイ！」を聞いた時点から、
ホイッスルの合図まで、フライングを確認します。

静止、ラインを踏んでいれば良いとの フライングルール上の違いは残りますが
選手サイドも審判目線も、フライングをしないように分かりやすくすることが優先されることと考えます。

◆将来的なスポーツ雪合戦の検討項目として

①開始時の混戦(いわゆるガチンコ)の判定改善

- センターゾーニング案 センターへ入れる選手の人数制限や一定時間の制限をおこなう。
- センターシェルター専有権/その行使は自由
開始時(30秒など時間制限付き)に一方のチームにセンターシェルターを取る権利を持たせる。
片方のチームは、もちろん攻撃は可能。
次セットは権利が移行、3セット目はトスにより決める。
但し、占有権の行使は自由でチームの戦略による。
これにより、開始時のセンターでの混戦が回避出来る。

五輪種目として認識されてきたカーリーグのように先攻、後攻の優位性を加えることで
競技としての雪合戦の戦略の面白さをアップできるのでは

②将来的な雪合戦スタイルとしてコートサイズの検証 普及しやすさを考慮しコンパクトな雪合戦の実戦。

③その他

- ・5人制/30mコート
- ・バックラインの廃止
- ・スタートはエンドラインから
- ・BK、FDの区分を排除
- ・他のルールは基本同様